戦後歴史教育と考古学

—千葉県下の高校日本史を中心として—

古内　茂

1．はじめに

考古学は，戦後目ざましい発展をとげた諸学問の内の一つで，地味ながらも古代文化解明に大きく貢献してきた。しかも敗戦という一つのエポックは存在したにせよ戦前の歴史観を大きく変えた。これには先学のたゆまぬ探究心と歴史的事実解明への努力を評価せねばなるまい。その結果，文化財保護思想の高揚は昭和22～25年に各大学を結集して総合的に調査された静岡県登呂遺跡，また昭和24年に調査された土器文化以前の群馬県岩宿遺跡等により表現されよう。さらに，これらの新しい情報は即座に教科書等の中に取り入れられることとなり歴史のページに加えられた。

一方，行政面でみると前記の歴史的事実の認識の中で，法隆寺の火災による文化財の焼失という事例とも重なり，それまでの各保存法に変わり昭和25年に文化財保護法を制定するとともに現文化庁の前身である文化財保護委員会を設置した。これはとりもなおさず、国家的にも文化財に対する関心が高まってきたことの結果とも言えよう。

その後，発掘調査は各大学が主体となって行われ数々の成果を上げるに至ったことは周知の事実であるが，千葉県下でも昭和34年・35年に印旛・手賀沼周辺，昭和37年には千葉市加曽利貝塚等の考古学的調査が大学，行政の共同で進められてきた。さらに昭和40年代に入ると，開発に伴なう発掘調査の件数はうなぎ登りに増加しそれまで大学に依存してきた調査体制も自治体自らが組織し現在に至っていることも周知のとおりである。国民的遺産の保護と一方では破壊にも連がるが発掘調査による古代文化の解明という中で行政の果してきた役割もまた評価されてしかるべきであろう。

だが，ここで発掘調査に携わる一員として兼々疑問に思ってきたことの一つに，調査の成果がどのような形で教育の場において取り上げられているかを知りたいと思いつつその機会を得ることができなかった。このことは弁明ともなろうが，調査する側ではその成果を利用する側への配慮も問題となろうし，過去の教科書に表われた発掘調査の成果を検討することも重要な課題と思われる。これを機に教育の場と考古学との関わりについて考えてみたい。

ここで使用した教科書は千葉県下で使われてきた高等学校日本史*だけとし，比較のためできる限り同一出版・同一編者をと考えたが手短かには入手できなかったため一部を任意に選択したことを付記しておく。

2．考古学上の成果と教科書の変遷

教科書は，その発行年度により改訂を重ねつつ若干づつ内容に変更が生じることは周知のとおりである。ここではその変遷を追いながら戦後から現在に至るまでの過程を比較してみることとしたい。なお，便宜的に約10年を一つの区切りとし，昭和30年前後，同40年前後，同50年前後，同60年前後の４区分で考え，その内容について触れてみたい。

(1)　昭和30年前後

戦後間もない教科書については入手困難であったため，昭和30年直後の以下の３冊を参考とした。

① 藤木邦彦「日本史」三訂版　昭和31年４月　秀英出版

② 川崎庸之・北島正元・菅野二郎　標準「日本史」昭和31年５月　教育出版

③ 相葉伸・小沢栄一・宮城栄昌「日本史」新版　昭和31年６月　清水書院

①の藤木邦彦による「日本史」三訂版では次のような構成をとっている。

第一編　原始・古代 { 第一章　原始社会の生活と変化 / 第二章　大和国家の発展 }

＊　教科書については千葉県総合教育センター内に設置されている図書室を利用させていただいた。

第一章では第一～三節に分節し，先土器（旧石器）時代から縄文時代を経て弥生時代に至るまでを対象とし，第二章でも三節に分けて主に大和朝廷について記述している。では，これらを時代別にみることとする。

先土器時代* 人類の進化と日本民族の形成について簡単に触れている他，岩宿遺跡出土の石器を無土器（前縄文式）文化として紹介し，合せて長野県上ノ平遺跡の石器もみられる。

縄文時代 この時代を「採集生活の社会」と規定し，その期間を2,000年程と推定している。「縄文式土器」，「貝塚」，「住居」，「集落」，「墳墓」で構成され竪穴式住居跡として市川市姥山貝塚が写真で紹介されている。

竪穴式住居跡（千葉県姥山）

昭和31年度出版（秀英出版）

弥生時代 「農耕生活の開始」と規定し，「弥生時代」，「青銅器」，「農耕社会」，「指導者の出現」等で構成され，弥生式土器の由来や農耕生活に基づいた富の蓄積と指導者の出現等の解説とともに登呂遺跡の水田跡が写真入りで紹介されている。他に，奈良県唐古遺跡，東京都久ガ原遺跡の記述もみられる。

古墳時代 「古墳文化」として古代日本の統一という中で触れられているだけで古墳に関する記述は少なく，仁徳天皇陵，人物埴輪の男女が写真で紹介される程度で，他は大陸との関係の中での解説となる。

②の川崎庸之他の標準「日本史」では次のような構成をとっている。

第１章　原始社会 ｛ 第１節　国土と住民 ／ 第２節　縄文式文化

第２章　古代国家の形成 ｛ 第１節　弥生式文化と農耕社会 ／ 第２節　大和国家の成立

本書では大旨先土器（旧石器）時代，縄文時代，弥生時代と各節で区分している。

先土器時代 人類の発生と起源についての簡単な記述にとどまる。

縄文時代 「縄文式時代の生活」，「習俗」により構成され，この時代の住居跡，石器，骨角器，装身具，土偶の写真とともに解説を加えている。また埋葬についても岡山県津雲貝塚の例を紹介。

弥生時代 「紀元前後の東アジア」，「弥生式文化」，「農耕」，「金属器」，「服飾」，「埋葬」で構成され稲作を中心とした農耕・文化を前期弥生式土器や登呂遺跡の写真等で解説し，青銅器も掲載されている。遺物出土地としては静岡県有東，奈良県唐古，福岡県須玖がある。

古墳時代** 「大和国家の成立」の中で「古墳」，「生活と技術」等により構成されている。中心は大陸との関係であり，古墳に関しては仁徳陵，形象埴輪を写真で紹介。他に奈良県佐味田黄金塚古墳から出土した家屋文鏡に描かれた高床住居も紹介されている。

③の相葉伸，他の「日本史」新版では次のような構成となる。

第１章　原始の社会と文化 ｛ １．原始の生活 ／ ２．農耕文化の発生

第２章　国の統一 ｛ １．大和朝廷と国家の形成 ／ ２．氏姓制の社会 ／ ３．大和国家の文化

ここでは序説に「歴史の黎明」として旧石器時代を取り上げ，その存在を示唆している。第１章では縄文時代，弥生時代とに分け，第２章では大和朝廷を中心に記述し，古墳についてはこの中で触れている。

先土器時代 序説で若干触れられて，注釈で明石原人・葛生原人や岩宿遺跡の記述がみられるにすぎない。

縄文時代 新石器時代として位置づけ「縄文式文化」，「社会構成」，「習俗と原始信仰」で構成し，

---

* 本論では縄文時代直前までを一括して便宜的に先土器時代とした。

** 古墳時代では遺跡としての古墳を中心として把えることとした。

石器等の生活用具や「敷石住居址」の名称も使用し，姥山貝塚や長野県尖石遺跡を紹介している。また，習俗と信仰では埼玉県真福寺遺跡と青森県亀ヶ岡遺跡の土偶と大阪府国府遺跡の埋葬人骨の写真が掲載されている。

弥生時代　「弥生式文化」，「稲作の始まり」，「服飾と習俗」，「金属器の伝来と製作」，「むらの発達」で構成され，金属器では輸入品と国産品との区別が目を引く。他に登呂遺跡の水田遺構と復原家屋の写真の他，唐古遺跡，久ガ原遺跡，福岡県比恵遺跡の名がみられる。

古墳時代　「大和国家の文化」の中で「古墳文化」，「神の信仰」等で構成される。仁徳陵の他に葺石と埴輪列をもつ前方後円墳として奈良県巣山古墳が紹介されている。また，奈良県都塚古墳の内部写真と全国の主な古墳の分布図も興味深い。その他，1ページを割いて古墳出土の遺物を紹介。

以上，3冊の教科書について触れてきたが，総じて先土器時代から弥生時代の内容は貧弱でページ数にして10～12となっている。中心は大和朝廷を中心とした記述で大陸との関係を知る志賀島発見の金印，好太王の碑，邪馬台国に主眼が置かれているようである。考古学的には登呂遺跡，岩宿遺跡と並び著名な伝香川県出土の銅鐸が共通して採用されているにとどまろう。一方，編集・解説の点について言えば，③の「日本史」新版では遺物の出土した地名が具体的に記載されており単に遺物を羅列するよりは説得力をもとう。しかし，②の標準「日本史」では竪穴住居址の写真の天地が逆となっていたり，石器と骨角器の写真も途中で截断し全体が把握できないようなものとなり，編集での粗雑さが窺われる。これは明らかに考古資料に対する認識の欠如であるとともにまだまだ考古学に対する意識の低さからくるものであろう。また①の「日本史」三訂版は昭和31年以降の教育センター保存の教科書の中で縦組により構成された唯一のものであった。

(2)　昭和40年前後

ここでは昭和40年発行の教科書が簡単に入手できず，昭和38・39年発行のものを参考とした。

① 彌永貞三・安田元久「高等日本史」昭和38年　帝国書院

② 小葉田淳・小沢栄一・赤松俊秀・小田泰正新編「日本史」昭和38年6月　清水書院

③ 西岡虎之助「高校日本史」新訂版　昭和39年5月　実教出版

①の彌永貞三・安田元久による「高等日本史」では以下のような構成となる。

第1章　日本の黎明
- 第1節　国土と民族
- 第2節　農耕文化の発生
- 第3節　国土の統一

本書では第1節を先土器・縄文時代とし，第2節を弥生時代，第3節を邪馬台国の出現から古墳文化へ至る時代にあてている。

先土器時代　日本列島や日本民族の形成に始まり，「無土器文化」（前縄文文化）の紹介で終る。民族では化石骨出土地として静岡県石・三ヶ日，栃木県葛生，愛知県牛川がある。無土器文化としては岩宿遺跡，上ノ平遺跡の石器が紹介されるにとどまる。

縄文時代　「縄文文化」としてその概要を簡単に説明し，代表的な土器，石器，住居址，抜歯・研歯の風俗等を写真で紹介。それらの中には千葉県城ノ台貝塚の尖底土器もある。遺跡では，宮城県大木囲貝塚，同県沼津貝塚，長野県尖石遺跡，愛知県伊川津貝塚等の著名な遺跡が類例としてあげられている。

縄文式土器　①早期の田戸下層式土器，口径18cm，高さ28cm
千葉県城ノ台貝塚出土。

昭和38年度出版（帝国書院）

弥生時代　「弥生文化」，「金属器」，「水稲耕作」，「小国家の分立」で構成され，弥生式土器を中心とし，稲作や小国家（部落国家）の成立について説明している。遺跡としては登呂遺跡，唐古遺跡，志登支石墓などの記載と写真がある。

古墳時代　第3節の中の一項として「古墳文化」があり，仁徳陵や福岡県竹原古墳の壁画，群馬県

茶臼山古墳の家形埴輪を写真で紹介。

②の小葉田淳，他の新編「日本史」では以下のような構成となる。

第1章　日本文化の黎明
- 第1節　日本民族の起源
- 第2節　新石器時代の生活と文化
- 第3節　農耕文化の発生

第2章　国家の成立と大陸文化の摂取
- 第1節　統一国家の形成
- 第2節　大陸文化と摂取

本書では第1章の日本文化の黎明の中で，節ごとに先土器時代，縄文時代，弥生時代を述べ，第2章の第2節で古墳時代の古墳文化に触れている。

先土器時代　「旧石器時代の日本」と位置づけ，岩宿遺跡や明石原人等の例をあげ旧石器時代の存在を肯定している。

縄文時代　「縄文文化」，「自然採集生活」，「社会のしくみ」，「習俗と原始信仰」により構成され，神奈川県大丸遺跡，同県夏島貝塚，茨城県椎塚貝塚，姥山貝塚，尖石遺跡等の遺物を類例とし説明している。

弥生時代　「弥生文化」，「金属器の使用」，「水田稲作の始まり」，「村の発達」で構成され，遺跡では登呂遺跡，唐古遺跡，有東遺跡の他，愛知県熱田貝塚，福岡県板付遺跡，滋賀県小篠原遺跡等を紹介している。

古墳時代　「大陸文化の摂取」の中で「古墳文化」「信仰と神話」とで構成され，奈良県巣山古墳や同県佐味田古墳・新山古墳出土の鏡，群馬県出土の埴輪を例とし簡単に触れている。

③の西岡虎之助による「高校日本史」新訂版では次のような構成となる。

第1章　日本文化の黎明
- 1．石器時代の生活と文化
- 2．農耕文化の発生

第2章　古代国家の形成と大陸文化の摂取
- 1．国家の成立
- 2．大陸文化の摂取と律令体制の成立

本書では石器時代の生活と文化の項で先土器時代から縄文時代を取扱い，農耕文化の発生で弥生時代，次いで国家の成立の中で古墳文化を説明している。

先土器時代　「日本人の起源」として無土器文化(前縄文文化)を，岩宿遺跡の石器を例に紹介し，簡単に述べている。

縄文時代　縄文時代を新石器時代と位置づけ「石器時代の生活」，「石器時代の社会」で構成し，生活の場として神奈川県南堀貝塚の集落跡の図示がある。遺跡では城ノ台貝塚，茨城県興津貝塚，岩手県大洞貝塚，山形県釜淵遺跡等の資料を紹介し，貝塚を中心とした構成となる。

弥生時代　「弥生式文化」，「水稲耕作」，「金属器」「社会の変化」で構成され，埋葬の差異にも言及している。遺跡では登呂遺跡，唐古遺跡，板付遺跡の他に栃木県野沢遺跡，神奈川県浦島山遺跡等が紹介されている。

古墳時代　「国家の成立」の項で「古墳」の説明をしており，古墳の分布図や各種の埴輪とともに鉄製農耕具の紹介もある。また注釈で古墳時代の前期・中期・後期の区分についても触れている。

以上，3冊の教科についてみてきたが，①と②では先土器時代から弥生時代に至る説明を9～10ページで，③では14ページを費していた。著名な遺跡や大和朝廷に関する記述は30年代の教科書とそれほどの変化は認められない。だが補助的に紹介に用いる個別の遺跡名では調査の成果に基づき比較的新しい資料が取り入れられている。他に①では章頭に各時代の代表的遺物の写真が掲載されたり，③では縄文時代の集落を図示していることなどを考えると考古学的な成果を取り入れようとする意識が窺える。また編集や用語等についても明確な相違は認められなかった。

(3)　昭和50年前後

ここでは昭和50年前後としたが使用した教科書はすべて昭和48年4月に改訂されたものであり，49年度使用のものとなっている。

① 井上光貞・笠原一男・児玉幸多　要説「日本史」(改訂版) 昭和48年4月　山川出版社

② 時野谷勝・原田伴彦・直木孝次郎「日本史」昭和48年4月　実教出版

③ 安田元久・井上鋭夫・大石慎三郎・土田直鎮・尾藤正英「新日本史」初訂版　昭和48年4月　帝国書院

①の井上光貞他による要説「日本史」(改訂版)では次のような構成となる。

第1部　原始・古代
- 第1章　古代国家の形成
- 第2章　律令国家の発展

第1章では，さらに1～3に区分し，1を先土器時代から縄文時代，2を弥生時代，3として大和朝廷から古墳文化のいわゆる古墳時代を取り扱

っている。

先土器時代　「洪積世の日本」,「先土器文化」で構成され，地質時代の年代を作表してその概要を解説するとともに岩宿遺跡に対し明確に「先土器」という表現を採用するようになる。

縄文時代　土器を中心として「縄文文化」，「縄文時代の生活」でまとめ神奈川県南堀貝塚の集落址や住居址を図示。また千葉県佐倉市江原台遺跡出土の土偶も呪術に関しての説明に使用されている。

土　偶　土偶は縄文後・晩期に多くつくられ，分布は東日本に濃密である。写真は後期のもので，千葉県江原台遺跡出土。（高さ12cm，明治大学蔵）

昭和48年度出版（山川出版）

弥生時代　「弥生文化の成立」,「農耕社会の発展」,「小国の成立」という項目で構成し，金属器の使用や登呂遺跡の写真等を使用し解説しているが，金印・魏志倭人伝・邪馬台国・卑弥呼などはここで取り扱っている。唐古遺跡・山木遺跡の木製品の紹介もある。

古墳時代　「大和朝廷と古墳文化」の中で「古墳文化」として取り扱い，竪穴式石室と横穴式石室の相違を図解により説明している。また群集墳という用語の使用もある。

②の時野谷勝，他による「日本史」では次のような構成をとる。

第1章　原始時代の社会と文化 { 1．日本人の起源 / 2．石器時代の生活と文化

第2章　古代社会 { 1．農耕文化の開始 / 2．日本の統一と古墳文化

第1章ではそれぞれ先土器時代，縄文時代とし第2章では1の農耕文化の開始を弥生時代，それ以下をいわゆる古墳文化との関連で構成する。

先土器時代　「日本の旧石器時代」，「日本人の祖先」で構成され，日本における旧石器時代の存在を想定するとともに岩宿遺跡出土の石器を「先土器時代の石器」として紹介している。

縄文時代　「縄文文化」,「社会の状態」という項で構成され，文化では土器と石器，社会では集落と信仰・習俗とに区分し説明。遺跡としては静岡県蜆塚貝塚，岩手県大洞貝塚，神奈川県南堀貝塚，岡山県津雲遺跡等がある。

弥生時代　農耕を中心に「弥生文化」，「金属器の使用」,「社会生活の発達」,「邪馬台国」で構成されている。高床式の倉や墓制の説明とともに邪馬台国に関する記述もこの時代に入っている。遺跡では登呂遺跡，唐古遺跡，山木遺跡，宮城県桝形囲貝塚，佐賀県桜馬場遺跡等の他，千葉県富津市出土の壺が紹介されている。

弥生式土器　丹塗（にぬり）壺。千葉県富津（ふつ）市出土。　高さ39.8cm。

昭和48年度出版（実教出版）

古墳時代　古墳関係では大和朝廷との関わりを中心に「古墳文化」として古墳出土の遺物である埴輪，馬具，装身具等を紹介し，遺跡では宮城県西都原古墳，静岡県御小原古墳，熊本県船山古墳，大阪府丸山古墳等の名もみられる。

③の安田元久他の「新日本史」初訂版では次のような構成をとる。

第１章　日本の黎明 { 第１節　原始社会 / 第２節　大和政権と古墳文化 }

ここでは第１節をさらに(1)縄文文化，(2)弥生文化とし，第２節を(1)政権の成立，(2)古墳文化とし鮮明に考古学的な時代区分を採用している。

先土器時代　「縄文文化」の項で岩宿遺跡の石器を例とし簡単に触れるだけであり，先土器時代と日本の旧石器時代とを同義語に近い形で使用している。

縄文時代　この時代の説明も「縄文文化」，「社会生活」と簡単なもので，土器・石器・骨角器を紹介し，他に住居址の形態や土偶等に触れる程度となる。遺跡としては城ノ台貝塚，大木囲貝塚，沼津貝塚等がある。

弥生時代　ここでは「弥生文化」,「金属器の伝来」,「水稲耕作の発生」，「小国家の分立」という順で構成され，それぞれに関連した遺構・遺物を図示して説明しているが邪馬台国については次の項に入れている。資料が少ないことにもよろうが遺跡も代表的なものにとどまる。

古墳時代　「古墳文化」の項で，「古墳時代」，「古墳文化」,「海外文化と婦化人」とに区分して構成しているものの，遺跡名では仁徳天皇陵，群馬県茶臼山古墳だけにとどまる。

以上，昭和48年改訂の３冊の教科書について概略を記してきたが，先土器時代から弥生時代に至る過程についてみると①では７ページ，②では15ページ，③では６ページとなりかなりのバラつきが認められた。ここでは使用しなかったが，同年出版の清水書院の場合には９ページを割いていた。次に内容について言えば，共通しているものとして「先土器」をあげることができる。昭和40年代においては「無土器」,「前縄文」として表現されていたものが，先土器の形での使用が定着する。また巻頭も考古資料によっ飾られるようになり，①では神奈川県神庭遺跡の住居址，高松塚古墳の壁画を採用し，②では表紙に人物埴輪を使用している。一方，①では考古学上の成果をもとに先土器時代から古墳時代に至る著名な遺跡の分布図を作製していることも見逃せない。しかし，③では古墳文化の説明に際して，古墳を前・中・後期の３期に分けられるとし，前期－小型・円墳，中期－大型・前方後円墳，後期－小型・群集墳との記述があり，大きな間違いとは言えないが，現在では前期古墳の中には多数の方墳が検出されており一概に円墳とすることはできない状況にある。これも近年の発掘調査の成果に負うところが大きいと言えよう。

大陸風の副葬品
環頭大刀（幅 12cm，千葉県金鈴塚出土）
昭和48年度出版(三省堂)

(4)　昭和60年前後

最新の教科書として昭和59年に出版され，昭和60年度用の次の３冊を参考とした。

① 永原慶二　高等学校「日本史」改訂版　学校図書　昭和59年
② 直木孝次郎「日本史」改訂版　昭和59年　実教出版
③ 井上光貞・笠原一男・児玉幸多「日本史」（改訂版）昭和59年　山川出版社

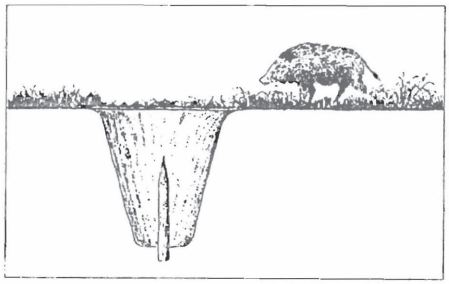
①の永原慶二による高等学校「日本史」改訂版では次のような構成をとっている。

第１章　日本文化の黎明 { 1. 原始社会と日本人の起源 / 2. 農耕文化の発生 }
第２章　古代の社会・文化の形成と展開 { 1. 国土の統一と大陸文化の摂取 / 2. 律令体制の成立と古代文化の形成 }

ここでは第１章を先土器時代から弥生時代にあて，次の第２章の１で弥生時代の一部と大和王権(政権)及び古墳文化を説明している。

先土器時代　「洪積世の日本」,「先土器文化」とで構成され，狩猟具の図解もみられる。主な遺跡として昭和51年に調査された宮城県座散乱木遺跡も紹介されている。

縄文時代　「縄文文化の発生」,「縄文社会の発展」,「日本人の起源」とによって構成される。文化の発生と関連し，土器型式はこれまでの５期から草創期を取り入れ６期に区分。また神奈川県霧ヶ丘遺跡の落とし穴の想像図まで掲載されている。



落とし穴(想像図)　横浜市の霧ヶ丘の平地から丘にかけて，図のような落とし穴が130個ほど見つかったが，このような例は各地でも発見されている。こうした大がかりな狩猟をすすめるには，人々の共同労働が必要であった。

昭和59年度出版(学校図書)

弥生時代　「東アジアの情勢」，「弥生文化」，「農耕の発展」，「国の分立」，「弥生文化の発展」で構成され，最新の資料を採用している。つまり，昭和39年に調査された東京都宇津木遺跡（昭和48年刊行）の方形周溝墓，昭和54年調査の佐賀県安永田遺跡の銅鐸鋳型等を紹介。

古墳時代　「古墳文化の形成」，「大和王権」，「大陸文化の摂取」，「古墳文化の変貌」等で構成され，ここでも新資料の紹介が目立つ。埼玉古墳群内の稲荷山古墳出土の鉄剣，奈良県新沢千塚の群集墳の分布などで古墳関係が主体となっている。

②の直木孝次郎による「日本史」改訂版では次のように構成となる。

第１章　日本文化の黎明 { １．日本最古の文化 / ２．縄文時代の社会と文化 }

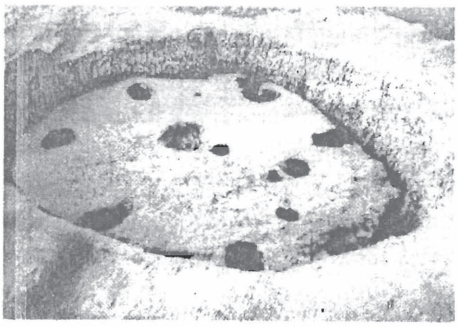
第２章　水稲農業の開始と社会生活の進展
{ １．弥生時代の社会と文化 / ２．国の分立と邪馬台国 / ３．古墳の成立と大和政権 / ４．大陸文化の摂取と古墳文化 }

本書では，第１章を先土器時代，縄文時代とし第２章の１・２を弥生時代，３・４を古墳時代にあてている。

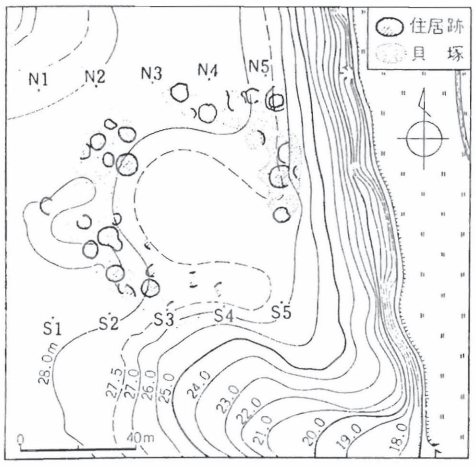
先土器時代　「日本最古の文化」と題し，「洪積世の日本」，「先土器時代」の項で構成される。写真資料として群馬県岩宿遺跡，同権現山遺跡，山形県新堤遺跡，長野県上ノ平遺跡，同神子柴遺跡の石器が採用され，他に同時期の遺跡は全国で，2,500か所以上発見されているとする。

縄文時代　ここでは「縄文文化の成立」から始まり，「縄文時代の生活」，「縄文時代の社会と習俗」，「日本人の起源」とで構成される。遺物の写真資料では長野県石小屋遺跡，千葉市加曽利貝塚，佐倉市弥富遺跡の他多数の遺跡の遺物が紹介されるとともに船橋市高根木戸遺跡，松戸市貝ノ花貝塚の集落も採用されている。

弥生時代　ここでは「弥生文化の成立」，「水稲農業の発展」，「生活の変化」，「階級社会の形成」と，次いで邪馬台国関係では「小国の分立」，「青銅祭器の分布」，「邪馬台国」の構成となる。前項では生活用具の他に滋賀県服部遺跡の水田，神奈川県歳勝土遺跡の方形周溝墓が写真で紹介されている。



竪穴式住居跡　千葉県高根木戸遺跡にある縄文時代中期の住居跡。柱穴がみられ，中央の穴が炉の跡である。



縄文時代の集落跡　直径約50ｍの広場をとりまいて31軒の住居が馬蹄形に並び，その外側に貝塚がある。住居はすべてが同時期のものではなく，中期から後期にかけてつくられたもの。千葉県貝の花貝塚。

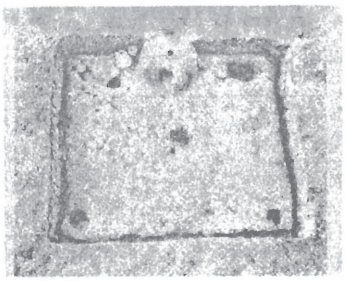
昭和59年度出版(実教出版)

土版　千葉県弥富（やとみ）
出土で長さ8.7cm。

昭和59年度出版(実教出版)

後者は大陸との関連が中心となる。

古墳時代　「古墳の成立と大和政権」の項の中で「古墳文化の成立」,「大和政権の成立」,「大和政権と朝鮮・中国」,「古墳文化の発展」等で構成され，次いで「大陸文化の摂取と古墳文化」では「新しい技術と渡来人」,「古墳文化の変貌」等となり，一応古墳の出現から終焉までを扱っている。図解では古墳の形態：構造も取り入れており，結果としては大和政権よりも古墳に重点が置かれている。また，この時期の住居址として千葉県白井先遺跡の例を掲載。



△かまどのある住居跡　千葉県白井先遺跡。

昭和59年度出版(実教出版)

③の井上光貞他による「日本史」（改訂版）では以下のような構成をとる。

第１章　原始・古代
- １．文化のはじまり
- ２．弥生文化の小国の分立
- ３．大和政権と古墳文化

本書では第１章だけで先土器時代から古墳時代に至るまでを扱っている。

先土器時代　「文化のはじまり」の項の前半で，「先土器文化」として一括し，岩宿遺跡，東京都前原遺跡，北海道置戸遺跡等の石器を図解で示している。

縄文時代　「縄文文化の発生」,「縄文時代の生活」とで構成され，土器の変遷，集落と貝塚（松戸市貝ノ花貝塚),埋葬等を図解。

弥生時代　「弥生文化の成立」,「農耕社会の発展」「小国の分立」で構成され，集落では神奈川県大塚遺跡，方形周溝墓群として同県歳勝土遺跡の例を写真で紹介。小国の分立では主として大陸との関係を説明する。

古墳時代　「大和政権の成立」,「大陸文化の導入」「古墳文化」,「古墳時代の生活と信仰」により構成され，古墳関係では埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣，前方後円墳の模式図，群集墳の構成，集落と住居跡（神奈川県神庭遺跡）等が図解される。

以上が昭和60年度に採用された教科書であり，ここでの感想を簡単にまとめてみよう。

まず先土器時代から弥生時代に至る間で，①では14ページ，②では15ページ，③では14ページとともに量的には拮抗しており内容も豊富で，古墳関係にも配慮した構成となっている。しかも，表で使用した同年度の「新日本史」(三省堂）では表紙・巻頭に考古資料を多数使用しており，当該年度の他の教科書でもこの傾向が認められる。

一方，最新の考古資料の採用という点について注目すれば，①では神奈川県霧ヶ丘遺跡検出の土坑を例にとり，「落とし穴」（想像図）を掲載している。落し穴の手前に猪が配置され，あたかも獣類捕獲のための施設のように描かれているところから若干表現に疑問を残す。つまり図解だけでは単に穴を掘削し杭を設定しただけであり，少なくとも平面図をつけ加えてほしい点と現在までの調査では落とし穴であるとの確証が得られておらず，民俗例等をもとにして推察している段階であるため教科書に採用することについては，少々早いと感じられた。

他に気付いた点として，古墳時代のしかも遺跡としての古墳がある。この点を昭和30・40年代と比較するとその取り扱いに大きな差が見い出される。30・40年代では大概，「大和国家」あるいは「大和政権」の項一部であったものが②や③では同列に扱われるようになってきた。これは明らかに発掘調査による資料の増大と古墳文化解明の研究の進展によるものと考えられる。

3．採用事例の比較

次に教科書に採用されている遺物・遺構・用語・遺跡名等の変遷について考えてみたい。ここで参考にした教科書はすべて三省堂から出版されているものである。

昭和34年刊　三省堂編集所　高校「日本史」
昭和39年刊　家永三郎「新日本史」改訂版
昭和48年刊　稲垣泰彦　三省堂「日本史」
昭和59年刊　家永三郎「新日本史」改訂版

以上，4冊の教科書をもとに，これらを表にまとめてみた。結果的にみれば，すべて同一著者による比較が最善と言えようが，ここでも全部統一することはできなかったため，せめて同一出版社の教科書ということで考えた。表は見てのとおり昭和48年刊以降は各項目ともその内容が増加し，順次新しく調査された遺跡等が加えられていることが理解できよう。では時代別にその内容について，前項と重複する部分もあるが簡単に触れてみたい。ただ，ここでは一般的な用語，共通の用語については削除したことを付記しておく。

先土器時代　ここでは文化名が変化しているため特に名称を設けその変化を追ってみた。昭和30年代は無土器文化として呼称されていたものが40年代後半に至ると先土器文化と呼ばれるようになり現在に至っている。この点について学界の現状をみると，旧石器文化という名称も使用されるようになっており，近い将来には旧石器を使用するようになる可能性も存在する。遺物についてみると昭和30年代では岩宿遺跡の遺物は掲載されているものの名称は与えられていない。40年代に入ると各地で先土器時代の遺跡，遺物が発見され，研究も進展するようになる。このことは遺跡の項でも同様と考えられ，東京都野川遺跡は昭和45年に調査され，同46年にその成果の発表があった。また長野県野尻湖底遺跡群は昭和37年に調査が開始され同48年までの成果が「野尻湖の発掘」として同50年に発表があった。

縄文時代　縄文時代はここで扱っている時代の中で最も最初に考古学的研究(大森貝塚，明治10年)がなされた時代であり，遺物の項では昭和30年代から豊富な内容を有するのもこのためであろうか。しかし，遺構・遺跡の項をみると，昭和30年代では代表的な三遺跡が継続して使用されており，変化は皆無となっている。これが59年刊分では遺構，遺跡・用語等に明確な変化が窺われる。遺跡の豊富さもさることながら集落についての記述が目を引く。これはとりもなおさず面的な調査の結果から生まれたもので環状貝塚，馬蹄形貝塚とも深く関わり研究の指針も個々の遺物から縄文時代の社会へと変化してきた証明となろう。またこの時代の時期区分も早期を二分し，草創期を加えて六区分となっている。

弥生時代　この時代も比較的早くから考古学的研究が開始されており，弥生の名称も周知のとおり明治17年に弥生町遺跡から壺が発見されたことに由来する。とりわけ青銅製品は遺存も良好であり研究対象としては最適なためか遺物の項でも当初から省略されることなく続いている。またこの時代は農耕文化として把えることもできるため稲作関係の遺物も充実したものと理解できる。このことは遺構の項でもよく表われている。一方，縄文時代同様ここでも集落研究に関わる成果も見逃すことはできない。濠とは，環濠のことでしばしば大集落を囲むように検出され，県下でも数遺跡で確認できている。これも面的な調査の成果と言えよう。また墓址では方形周溝墓の命名も記憶に新しい。東京都宇津木遺跡での確認をもとに昭和46年に方形周溝墓と呼ばれ現在に至っている。遺跡の項では登呂遺跡の影響があまりにも強く，登呂を抜きにしては弥生は語れないと言っても過言ではないだろうが昭和40年からの調査により遺跡名もかなり増加している。

古墳時代　ここでも弥生時代と同様な傾向にあり基本的な遺物・遺構・遺跡についての変化はないものの生産遺跡としての窯跡にも注意を傾けるようになってきた。これは主に須恵器の生産であり，職業的な専門集団の存在を大陸文化との一連の関わりの中に位置づけるようになってきた。また最近の科学的手法の進展は埼玉県稲荷山古墳の鉄剣，奈良県高松塚古墳の壁画にも応用され大きな成果をあげている。

4．青銅器の分布について

時代の経過とともにその変化を表わしている事例として，今一つ青銅器の分布を取り上げてみたい。図示した青銅器分布圏図はここで使用した昭和31年版から同59年版の約30年間の教科書の縮図とも言える。青銅器そのものは遺物として重要で

		昭和34年刊	昭和39年刊	昭和48年刊	昭和59年刊
先土器時代	名称	無土器文化 先縄文文化	**無土器文化**	**先土器文化** **先縄文文化**	**先土器文化**
	遺物			握りつち，楕円形石器，ナイフ形石器，石槍，石刃，細石器，細石刃，細石核	握りつち，ナイフ形石器，石槍，石刃
	遺跡	岩宿(群馬)	岩宿(群馬)	**岩宿・権現山**(群馬)，神山(新潟)，馬場平・矢出川(長野)	白滝(北海道)，越中山(山形)，**岩宿・権現山**(群馬)，星野(栃木)，野川(東京)，月見野・北原(神奈川)，野尻湖底(長野)帝釈峡観音堂(広島)，国府(大阪)，福井洞穴(長崎)
縄文時代	遺物	**縄文式土器**，尖底土器 **石斧，磨製石斧，打製石斧，石鏃，石槍，石匙，敲石，石皿，石錘，銛，針，釣針，腕輪，耳飾，土隅**	**縄文式土器** **石斧，打製石斧，磨製石斧，石鏃，石槍，石匙，石皿，砥石，銛，針，釣針，腕輪，土偶，石棒**	**縄文式土器**，注口土器，尖底，**土錘** **磨製石斧，打製石斧，石鏃，石槍，石匙，石剣，青龍刀形石器，石錘，銛，釣針，腕輪，耳飾，土偶，土版石棒，独鈷石**	**縄文土器** **磨製石斧，打製石斧，石鏃，石槍，石匙磨石，石皿，石錘，銛，針，釣針，**やす**土偶，岩版，石棒，丸木舟**
	遺構・用語	**竪穴住居** **貝塚** **屈葬**	**竪穴住居** **貝塚** **屈葬**	**竪穴住居，集落址** 貝塚，環状	**竪穴住居**，集落跡 貝塚，環状，馬蹄形，**屈葬，伸展葬，叉状研歯**，縄文時代草創期
	遺跡	亀ヶ岡(青森) 姥山(千葉) 津雲(岡山)	亀ヶ岡(青森) 姥山(千葉) 津雲(岡山)	亀ヶ岡・一王寺(青森)，大洞(岩手)羽後(秋田)，板倉(群馬)，古堂（茨城)，**姥山・堀之内・加曽利**(千葉)，夏島・南堀・潮見台(神奈川)，**尖石**宮の前(長野)，**吉胡**(愛知)，国府(大阪)，**津雲**(岡山。)	沼津・青島(宮城)，加曽利(千葉)，港北ニュータウン・五領ヶ台・南堀・平坂(神奈川)，石小屋・井戸尻(長野)，滋賀里・元水茎(滋賀)
弥生時代	遺物	**弥生式土器** **石包丁，鉇，刀子，銅剣，銅鉾銅戈，銅鐸，鋤，鍬，杵，臼，田下駄，田舟**	**弥生式土器** **銅剣，銅鉾，銅戈，銅鐸**	**弥生式土器**，壺，甕，甑，高坏，**磨製石斧**，抉入石斧，片刃石斧，**石鏃石槍，石剣，石包丁，鉇，刀子，銅剣，銅鉾，銅戈，銅鐸，鋤，鍬，杵臼，田下駄，田舟**	**弥生土器**，壺 **磨製石斧**，のみ形石斧，おの形石斧，かんな形石斧，打製石鏃，石槍，**石包丁**，鉄斧，銅剣，平形銅剣，銅矛，銅戈，**銅鐸**，銅鏡，**鋤，鍬，杵，臼**
	遺構・用語	住居址，**高倉式倉庫** 甕棺墓，箱式石棺墓，支石墓	住居址，倉庫址，水田址，甕棺墓，箱式石棺墓，支石墓	住居址，高床倉庫，**濠**，墓壙，甕棺箱式石棺，**支石墓**，方形周溝墓，土壙	**水田跡，濠** 支石墓
	遺跡	**登呂**(静岡) 熱田(愛知)	登呂(静岡) 熱田(愛知)	**登呂**・有東・山木(静岡)，高蔵（愛知)，大中湖南(滋賀)，桜ヶ丘・田能(兵庫)，紫雲出(香川)，桜馬場・葉山尻(佐賀)	**登呂**・有東(静岡)，大中湖南・服部（滋賀)，唐古(奈良)，船橋・鬼虎川・池上・瓜生堂(大阪)，桜ヶ丘(兵庫)，岡崎山(鳥取)，立岩(福岡)，原ノ辻(長崎)
古墳時代	遺物	土師器，須恵器，**埴輪** **馬具，甲冑，冠**	土師器，須恵器，**埴輪** **剣**，環頭大刀，金銅環，**鏡**	土師器，須恵器，**埴輪**，石釧，車輪石，鍬形石，環頭大刀，七支刀，鞍金具，金銅冠，国産銅鏡	**土師器，須恵器**，坏，**埴輪，かまど**，石製腕飾，短甲，**鉄鎌**，冠
	遺構・用語	**古墳，前方後円墳，円墳，群集墳**，火葬墓，**甕棺，竪穴式石室横穴式石室，葺石**	**古墳，前方後円墳，円墳**，群集墳	**古墳，前方後円墳，円墳，方墳，群集小古墳，横穴，竪穴式石室，横穴式石室，木棺，粘土郭，集石**	**古墳，前方後円墳**， 竪穴式石室，木棺，粘土郭，**墳丘** 窯跡群，**窯**
	遺跡	**仁徳陵・応神陵**(大阪) 西都原古墳(宮崎)	二子山古墳(群馬)，金鈴塚古墳(千葉)，山木(静岡)，**仁徳天皇陵・西瓜破**(大阪)，江田船山古墳(熊本)	二子山古墳(群馬)，吉見百穴(埼玉)金鈴塚古墳(千葉)，**仁徳天皇陵・応神天皇陵**・履中天皇陵・丸山古墳(大阪)，**造山古墳**(岡山)，江田船山古墳(熊本)	天神山古墳・矢場川(群馬)，稲荷山古墳(埼玉)，高松塚古墳・桜井茶臼山・大和二塚古墳(奈良)，**仁徳陵・応神陵・古市古墳群・百舌古墳群**・茶臼山・陶巴（大阪)，造山古墳(岡山)，上八万(徳島)，竹原古墳・稲童(福岡)，江田船山古墳(熊本)

表　採用事例の年度別比較 ※ゴヂックは本文使用用語，明朝は表・図・説明文等での使用用語

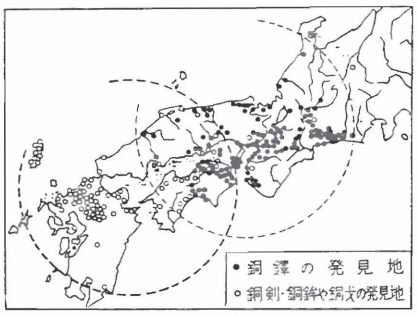
あるとともに，弥生時代人の生活を描いている伝香川県出土の著名な袈裟襷文鐸等の例もあり古くから研究の対象となっていたため，銅剣・銅鉾・銅戈と銅鐸分布圏あるいは文化圏としての差異が指摘されてもきた。

このような点から，過去30年間の分布圏の変化を追っていくと，秀英出版昭和31年度版での銅鐸分布圏は東は静岡県西部にとどまっており，これが三省堂同48年度版ではさらに東漸し伊豆半島にまで及ぶこととなった。このことは引用文献にも示されているとおり明治大学の杉原荘介氏を中心とした東京考古学会による「日本青銅器発見地名表」(1965) の成果に負うところが大きいものと思がれる。事実，学校図書による同59年度版ではその分布をみる限り，同48年度版とほとんど差は認められない。

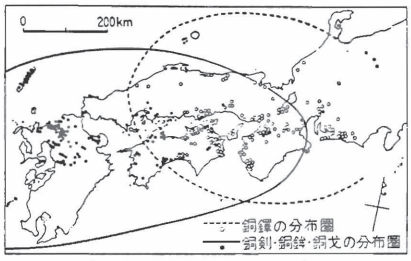
だが，近年の調査において小型ながらも銅鐸と呼べるものが関東で三例検出されている。そのうちの二例は県内市原市から，他の一例は栃木県となっている。銅鐸の大きさ（高さ）は10cm強であり，畿内出土品とは比べようもないが，明らかに銅鐸としての形態を整えており学会に投げかけた問題は大きい。また銅鐸に準ずる小銅鐸も市原市及び神奈川県で各一例出土しているところから銅鐸分布圏も近い将来には必ずや関東にまで拡大した形で日本史の教科書に掲載されることになろう。

5．まとめ

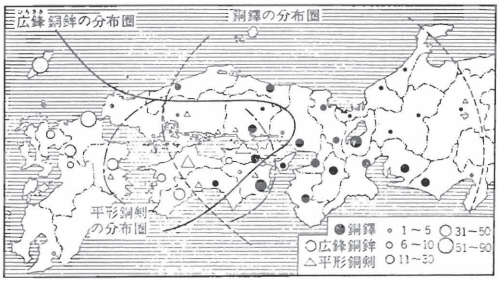
以上，10数冊の千葉県下で使用された高校日本史の教科書を参考に歴史教育の内容について触れてきた。これだけで戦後の歴史教育を語るつもりは毛頭ないが，これだけの教科書でさえも着実に考古学的成果を取り入れて解説していることが認識できたことだけでも筆者自身満足している次第である。我々の現場での調査は実際地味であり，ややもすれば最近の調査は開発のためだけの調査に終始してしまうような感がしないでもない。だが一方では博物館，資料館等での展示による社会教育的な面のみならず学校教育の場においても最新の調査成果をもとに教科書が構成されており，一時の安堵と相成った。これはつまり，遺跡の厳密な調査と同時に文化財を保護し後世に伝えることが歴史に対する認識を深め科学の発展と結びつくこととなり，さらに正確な形で日本歴史を解明するものへと続くこととなる。また，教育の場での事例はより容易に埋蔵文化財についての理解に結びつくことになるとも考えられる。



青銅器の分布
昭和31年度出版（秀英出版）



青銅器出土地の分布
昭和39年度出版（実教出版）



青銅祭器の分布図（東京考古学会編「日本青銅器発見地地名表」による）
昭和48年度出版（三省堂）

青銅器の分布〈上〉
昭和59年度出版（学校図書）

青銅器分布圏の変遷

最後に教科書を快く提供して下さった千葉県総合教育センターに文末ながら感謝する次第である。